第 34 回（'24）書学書道史学会大会

今年度の大会は、10 月 26 日（土）・27 日（日）の両日、大東文化大学板橋校舎（〒175-8571 板橋区高島平 1-9-1）において開催します。詳しいプログラムは 3 頁のとおりです。研究発表に加え、記念講演会とシンポジウムを企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

本状は大会当日にお持ちください。会員の確認として使用する場合があります。

なお、本大会の開催に関する最新の情報は学会ホームページでお知らせいたしますので、本状発送の後も随時ご確認ください。またホームページには、本状のデータを掲載しますので、適宜ご利用ください。

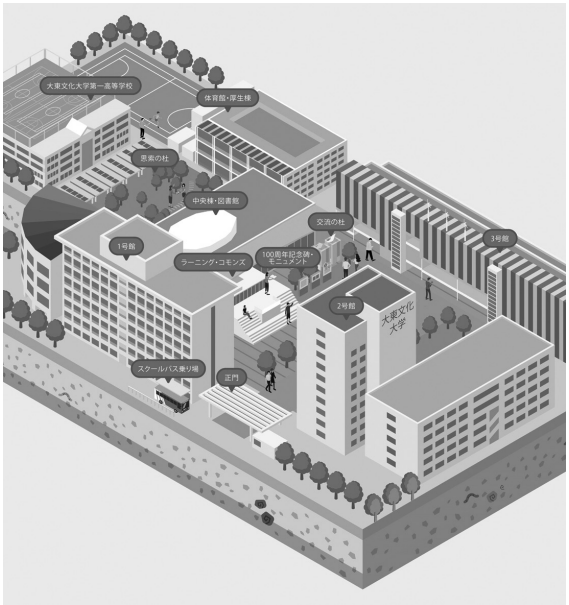
10 月 26 日（土）

12：00	受付開始
13：00 ～ 14：00	開会式・総会
14：00 ～ 15：00	研究発表
15：15 ～ 17：00	シンポジウム
17：30 ～ 19：30	懇親会

10 月 27 日（日）

9：30	受付開始
10：00 ～ 12：10	研究発表
13：10 ～ 14：50	研究発表
15：00 ～ 16：20	記念講演
16：20 ～ 16：30	閉会式

〈大東文化大学板橋校舎 3 号館〉



〈大東文化大学板橋校舎マップ〉

大東文化大学へのアクセスは以下のとおりです。
都営三田線「西台」駅西口下車、徒歩 9 分
東武東上線「東武練馬（大東文化大学前）」駅下車、無料スクールバスで 5 分

大会関係各種連絡事項

○大会参加申込みは、**10 月 11 日（金）まで**に下記の URL または二次元コードから申し込みフォームにアクセスしていただき、必要事項を入力の上ご送信ください。**締切厳守**でお願いいたします。**大会当日の参加受付はいたしかねます**ので、事前の申し込みにご協力ください。

https://forms.office.com/r/RnFSAehFP6

なお、申し込みフォームへのアクセスが難しい場合は、事務局（連絡先は 4 頁）までご一報願います。

○大会参加費（資料代を含む）および懇親会参加費は、同封の「振込取扱票」に必要事項をご記入の上、**10 月 11 日（金）まで**に納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。年会費との合計金額の入金は禁止いたします。やむを得ず払込票を利用せず、口座に直接参加費を入金する場合は氏名の頭に「0」を付けて入金してください。なお、当日会場では、現金を取り扱いませんので、あしからずご了承願います。

○今回の大会では、**会員 1 名につき非会員 1 名の同伴参加を認めます**。非会員の同伴を予定している会員は、上記の申し込みフォームに同伴非会員の氏名・所属も登録してください。また、上記の「振込取扱票」により同伴非会員の参加費（大会、懇親会）も納入してください。

○大会参加費は、**一般会員が 2,000 円**（同伴非会員も同額）、**学生会員は無料**です（同伴非会員が学生の場合は無料）。懇親会参加費は、**一般会員・同伴非会員が 5,000 円**、**学生は会員・非会員を問わず 2,500 円**です。

	大会参加	懇親会参加	計
一般会員	○	○	7,000 円
	○	×	2,000 円
学生会員	○	○	2,500 円
	○	×	0 円

○今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、大会の模様をオンラインで配信いたします。この場合でも、一般会員には上記の期限までに参加費の納入が必要となります。オンラインでの参加を希望する方は、上記の申し込みフォームの所定欄に入力してください。

○**昼食は、各自でご用意ください**。会場の多目的ホールで昼食をとることが可能です。なお、役員・幹事の方には 26 日の昼食を別途用意いたします。

○宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、各自で手配していただくこととし、事務局では手配いたしません。

○学会からの派遣申請書が必要な方は、学会ホームページに PDF ファイルを掲載しておりますので、印刷の上ご利用ください。

第 34 回（'24）書学書道史学会大会プログラム

10 月 26 日（土）　於：大東文化大学板橋校舎 3 号館 多目的ホール

12：00　受付開始
13：00 ～ 14：00　開会式・総会
14：00 ～ 15：00　研究発表
① 14：00 ～ 14：30「「国語国字」問題をめぐる鬩ぎあい
—書家比田井天来（一八七二 — 一九三九）を中心に—」
柯　輝煌（東京大学大学院）【司会：髙橋　利郎】
② 14：30 ～ 15：00「日本における朱熹書『易繫辞』に関する考察」
鄭　天貽（関西大学大学院）【司会：峯岸　佳葉】
15：15 ～ 17：00　シンポジウム「書の人文情報学」
基調報告
「書道コンテンツのデジタル公開の在り方」　藤森　大雅氏（大東文化大学）
「碑帖拓本デジタルアーカイブの研究利用について」　成田　健太郎氏（京都大学）
「デジタルアーカイブ・人文情報学に関する技術紹介」　中村　覚氏（東京大学）
【司会：菅野　智明】
17：30 ～ 19：30　懇親会　於：生協食堂
※会期中の特別展示　於：3 号館 305 教室

10 月 27 日（日）　於：大東文化大学板橋校舎 3 号館 多目的ホール

9：30　受付開始
10：00 ～ 12：10　研究発表
③ 10：00 ～ 10：30「醍醐朝における唐風受容の一様相 —小野道風「屏風土代」を中心に—」
陳　雪溱（東京大学大学院）【司会：永由　徳夫】
④ 10：30 ～ 11：00「銭松の篆刻作風について —「印中求印」の展開を中心に—」
草野　剛（筑波大学大学院）【司会：増田　知之】
⑤ 11：10 ～ 11：40「里耶秦簡の字形認識 —网部字—」
村田　萌（大東文化大学大学院）【司会：矢野　千載】
⑥ 11：40 ～ 12：10「秦印に関する一考察」　滑田　一輝（東京学芸大学）【司会：福田　哲之】
12：10 ～ 13：10　記念撮影・昼食
13：10 ～ 14：50　研究発表
⑦ 13：10 ～ 13：40「蔡邕飛白創始説について」
仲村　康太郎（京都大学大学院）【司会：剣持　翔伍】
⑧ 13：40 ～ 14：10「河井荃廬の訪中と交流 —上海・杭州を中心に—」
川内　佑毅（東洋大学）【司会：弓野　隆之】
⑨ 14：20 ～ 14：50「原田大観の訪中収蔵活動について」
下田　章平（相模女子大学）【司会：中村　史朗】
15：00 ～ 16：20　記念講演
「翁方綱『孔子廟堂考』の検証と補遺」
澤田　雅弘氏（名誉会員、大東文化大学）【司会：河内　利治】
16：20 ～ 16：30　閉会式

講師紹介　澤田 雅弘（さわだ まさひろ）氏

1954 年生。大東文化大学大学院中国学専攻博士後期課程単位取得退学。同大学文学部教授。群馬大学名誉教授。本学会元理事長、現在、名誉会員。「明中期呉中文苑考」「潤例の発生と展開」「飲墨について」「焦循『里堂道聴録』所録の南北書派論・北碑南帖論について」「書法史における刻法・刻派という新たな視座」「三井本十七帖考」等、論文多数。

大会に関する問い合わせ先

書学書道史学会事務局　〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 7F
(株)毎日学術フォーラム内　TEL 03-6267-4550 ／ FAX 03-6267-4555
Email：maf-syogaku@mynavi.jp

発表者への連絡事項

○発表者の持ち時間は、**30 分（発表時間 20 分、質疑応答 10 分）**です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。

○発表者各位においては、発表資料を **A3 判両面印刷最大 5 枚まで**（複数枚の場合は綴じること）として **10 月 21 日（月）まで**に、下記の宛先へ送付願います。**印刷部数は、15 日（火）までにお知らせ**します。

〒175-8571 板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学文学部書道学科事務室
担当：髙橋利郎先生　TEL 03-5399-7336

※送付伝票備考欄等に**「書学書道史学会研究発表資料在中」**と記載してください。

○今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、研究発表をオンラインで配信いたします。発表者各位には、**オンライン用に、発表資料のデータ（PDF ファイル）**をご作成いただき、**10 月 21 日（月）まで**に、こちらは**事務局宛に E メール**（上記参照）でご送付ください。

○発表会場にはパソコン、プロジェクターを設置します。ご利用の場合、事務局宛にその旨をお知らせください。ご自身のパソコン（HDMI 端子のある）をご持参いただいても結構です。その際も、事務局へご一報願います。いずれの場合も、当日は **USB メモリー**をご持参ください（**PPT データ**の他に、念のため**その PDF データ**もご用意ください）。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。

○各発表の司会者は、諸般の事情で変更が生じる場合があります。

役員・幹事への連絡事項

○**理事・監事・諮問委員各位**には、必ず 2 頁の**申し込みフォーム**から**理事会出欠のご回答**をお願いします。**幹事各位**にも、同様に**資料封入作業の出欠の回答**をお願いします。いずれも昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。

○**理事・監事・諮問委員各位**には、**10 月 26 日（土）11：00** より本年度第 3 回理事会を開催いたしますので、大東文化大学板橋校舎 **3 号館 321 教室**へご参集ください。

○**幹事各位**には、**10 月 26 日（土）10：30** に作業を行う大東文化大学板橋校舎 **3 号館 307 教室**へご参集願います。資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしますので、ご承知おきください。

以　上

①「国語国字」問題をめぐる鬩ぎあい
―書家比田井天来（一八七二―一九三九）を中心に―

柯　輝煌

自分の問題関心は十九世紀末から二十世紀初頭にかけて東アジア地域におけるナショナリズムによる近代国民国家の形成、いわゆる中華秩序の崩壊と共に「漢字」がどのように扱われたのかという点である。また、植民地支配において「漢字」がどのような役割を果たしたのかという問題提起である。本発表は「書道」という芸術分野の視点から以上に述べた問題を再考する。

現在、比田井天来に対する研究は主に書風の研究や臨書とする分析である。書家が「漢字」を書くことは当然だと思われるかもしれないが、比田井天来が生きている時代の政治や社会的な状況から見れば必ずしもそうではない。

代表的な事例としては一八九四年の日清戦争の後、日本のナショナリズムが強まっていく過程で言語学者たちが漢字を「中国」の文字と見なし、明治国家の官僚たちが「国語」を定める際に「漢字全廃論」や「漢字削減」を提唱していた。従って、「国語国字」問題をめぐって漢字をどのように扱うかは常に争点となる。

本発表はまず国語の概念が成立する際に、「漢字」の位置付けや優劣をめぐって当時の知識人たちの間にどのような論争があったのかを整理する。次に文部省と関わっている「漢字整理案」はどのような理念に基づいて作られたのかを分析する。興味深いのは、書家としての比田井天来が文部省の「漢字整理案」に対して強く批判しているという点である。また、「国語国字」問題と深く関わっている漢字整理の問題についてもしばしば言及することがあった。

そもそも書家比田井天来は漢字に対してどのような認識や価値観を持っているのか特に注目されていない。ではなぜ彼が漢字整理の問題に関わってくるのか。明治国家の形成と植民地の領有により輪郭がはっきりしている国語が要請され、そこに絡んでいる「漢字」とナショナリズムとの関係、また植民地支配のイデオロギーと深く関わる諸問題を再考していきたい。

（東京大学大学院）

②日本における朱熹書『易繫辞』に関する考察

鄭　天貽

本稿は、中国南宋時代の思想家である朱熹の大字書『易繫辞』が日本にどのように受容され、伝播されたかを明らかにすることを目的としている。

朱熹書『易繫辞』は、現在台北故宮博物院に保存されている唯一の現存する大字作品であり、朱熹が四〇歳から四四歳の間に書いたと推測されている。内容は『易経』の「繫辞」である。朱熹書『易繫辞』は中日両国で異なる版本が現存しており、第一節ではその諸版本について概説する。その中で、日本における朱熹書『易繫辞』の流伝は、主に細井広沢の翻刻と真跡の一時来日に分かれている。

江戸時代中期の唐様書家・儒者である細井広沢は、朱熹書『易繫辞』を翻刻し、『思貽齋珍藏太極帖』と名付けた。第二節では、細井版の底本や翻刻の経緯、方法、さらにその流布について考察している。広沢自筆の『思貽齋珍藏太極帖後序』や大和延年『二老略伝』、柳沢家日記『楽只堂年録』などの史料により、細井広沢が柳沢家蔵の朱熹『易繫辞』の贋墨本を基に「正面打碑法」で翻刻し、完成後に拓本を作って周囲に贈ったことがわかる。現在、東京大学図書館の南葵文庫と青州文庫に一七一四年版の『宋徽圀文公朱先生眞迹太極帖』の拓本が所蔵されており、これが完成時の贈り拓本と推測される。また、細井恭次郎による一八八九年の翻刻本は国立国会図書館のデジタルコレクションに公開されている。細井版の版木は東京都世田谷区の満願寺に所蔵され、細井広沢も同寺に葬られている。

台北故宮博物院に所蔵されている真跡は、かつて清内府の収蔵品であり、後に恭親王府に賜ったが、辛亥革命の影響で羅振玉の手に渡り日本に流入した。大正元年（一九一二年）に大阪の油谷博文堂によって『宋朱子書易繫』として出版され、書道雑誌『書苑』や『斯文』にもその情報が掲載された。一九一九年二月号『斯文』と台北故宮博物院の記載によると、羅振玉の後に岩崎家の収蔵となり、さらに中国書画の収集家である林宗毅の手に渡り、一九八三年に台北故宮博物院に寄贈された。

本稿は、朱熹書『易繫辞』の日本における受容過程を詳細に記述し、中日両国における文化交流の一端を明らかにするものである。

（関西大学大学院）

シンポジウム「書の人文情報学」

これまで人文系の各学域では、デジタル技術を駆使した情報学の成果を積極的に取り入れ、そこから人文情報学という学際的領域を確立させてきました。本シンポジウムでは、このような人文情報学的アプローチで書の研究に取り組む三名の会員より、その実践を報告いただきます。それを踏まえ、書の研究と人文情報学との協働の可能性について議論を深め、急速に技術革新が進展する現下、新たな研究を模索する示唆を得たいと思います。

〈基調報告〉

「書道コンテンツのデジタル公開の在り方」

藤森　大雅（大東文化大学）

大学が所有する拓本コレクションのデジタル公開に携わった経験から、研究機関が所有するコレクションの特性を踏まえたアーカイブスサイトの仕様、拓本資料の調査方法、公開後のコンテンツの充実などの問題を中心に、書道コンテンツの公開の在り方について私見を述べたい。

「碑帖拓本デジタルアーカイブの研究利用について」

成田　健太郎（京都大学）

デジタルアーカイブの発展は昨今著しく、各種資料のデータがウェブ上でより広く公開され、研究上の需要も高まっている。碑帖拓本資料もその例外ではなく、研究環境の向上と研究手法の更新が期待される。碑帖拓本デジタルアーカイブにいかなる研究利用を思い描くのか、原資料の所有者、書学書道史および人文学情報学の研究者の三者の視点から、展望と課題を探りたい。

「デジタルアーカイブ・人文情報学に関する技術紹介」

中村　覚（東京大学）

本報告では、デジタルアーカイブと人文情報学に関する基礎的な技術、特にIIIF、TEI、画像処理技術などについて紹介する。これらの技術が文化的資料のデジタル化やアクセシビリティの向上にどのように寄与するかを概観する。さらに、成田健太郎氏との碑帖拓本デジタルアーカイブ構築に関する共同研究を基に、これら技術の応用例を示す。これらの事例を基に、書の研究における人文情報学の役割について議論を深めたい。

③醍醐朝における唐風受容の一様相
―小野道風「屏風土代」を中心に―

陳　雪湊

「屏風土代」（皇居三の丸尚蔵館）は、小野道風（八九四～九六七）が延長六年（九二八）に醍醐天皇（八八五～九三〇、在位八九七～九三〇）の勅命に応じて、内裏屏風に大江朝綱（八八六～九五八）の漢詩を揮毫した下書きである。本巻に署名はないが、巻末の藤原定信（一〇八八～一一五六）による奥書と『日本紀略』延長六年十二月の記事から、道風の確実な真跡と考えられる。「屏風土代」に見られる重厚と量感を兼ね備えた曲線的な筆遣いは、「和様の書」の特徴と指摘されてきたが、盛唐における玄宗（六八五～七六二、在位七一二～七五六）の好尚を端緒とする豊満で穏やかな宮廷書風との共通点が多く窺える。

国風文化の萌芽期とされる醍醐朝で活躍した道風は、唐様から離脱して和様の創始者と位置付けられるが、盛唐書風との関連性は、まだ十分に議論されていない。醍醐朝の書を議論するにあたり、「和様」成立の時代背景だけでなく、盛唐様式の革新、作品流通の時差、書風受容の重層性などの歴史的要因も視野に入れる必要があろう。

以上の問題意識を踏まえ、本発表では、まず玄宗朝以降の皇帝御書と、皇室ゆかりの碑銘と墓誌、敦煌残巻、公文書など現存する書跡や拓本との比較を通じ、「屏風土代」書風の源流を再検討する。次に『醍醐天皇御記』をはじめ、藤原忠平（八八〇～九四九）『貞信公記』、重明親王（九〇六～九五四）『吏部王記』、藤原行成（九七二～一〇二八）『権記』、皇円（？～一一六九）『扶桑略記』など、平安時代中期の史料の中で書法に関する記事を整理する。伝存作品と文献を照合分析することで、醍醐朝の内裏において実見できていた最先端の書風の摂取、および書法御覧や模本制作の実像に迫る。

小野道風の現存作例を通じ、その書風は初唐から盛唐に至る王羲之（三〇三～三六一）への崇拝を反映し、加えて盛唐・中唐に変化した新しい宮廷書風と狂草書風が併用されており、実際にはこの時期の異なる意味を持つ「唐」の規範性を積極的に選択吸収したことがわかる。国風文化をめぐる言説の再考が進む近年、本発表はその動向と呼応し、唐風受容の段階的変化を捉え、書道史的な位置付けを試みたい。

（東京大学大学院）

④錢松の篆刻作風について
―「印中求印」の展開を中心に―

草野　剛

清朝中後期の篆刻史に関する先行研究では、浙派と鄧派が主要な対象とされ個別の印人の作例や思想の分析には少なからぬ蓄積がある。とりわけ重視されてきたのは、鄧派印人らによって導入された「印従書出」や「印外求印」といった新概念であり、趙之謙や呉昌碩は主として鄧派の流れを汲むものとして捉えられてきたと言ってよいだろう。翻って浙派についての先行研究を概観すれば、創始者・丁敬の刀法の創新による新たな作風の確立と、西泠八家を中核とする浙派印人らによる丁敬の作風の継承が先学の検討の主眼であり、清朝後期から清末にかけて浙派が果たした役割はこれまで十分に顧みられてこなかった。

本発表では、清朝中後期の篆刻史における浙派の位置づけを再検証することを目的とし、従来は一括して捉えられてきた西泠八家のうち、その掉尾を飾る錢松の篆刻作風の展開に焦点を当てる。錢松に関する先行研究では、すでに童衍方氏が、汪啓淑編『漢銅印叢』をもとに秦漢に遡って学んだことで、変化に富んだ独特な作風を生み出したことを指摘しているが、錢松の篆刻作風と『漢銅印叢』中の印章との共通点、及び従来の浙派の作風と相違点を十分に明らかにしておらず、さらに浙派を含む清朝篆刻史において錢松がいかに位置づくのかという点に踏み込んで言及していない。

本発表ではそれらを踏まえ、錢松の創作手法と印学観の独自性はいかなる点に認められるか、それは浙派において定型化した作風から脱却し得たのか、それらは後世の印人にどのような影響を与えたのかという点を主たる問題とする。それを解明するにあたり、錢松の作例と『漢銅印叢』等の取法対象と見られる印章、及び西泠八家を中心とする浙派印人の作例を広く対照し、錢松に至って浙派の篆刻作風がいかなる変容を遂げたのかを明らかにする。さらに清末の印人らによる錢松への評価を視野に入れて考察し、旧来の「印中求印」の概念を手掛かりに清朝中後期の篆刻史における錢松の位置づけを見直すことで、既存の流派観の再構築を試みたい。

（筑波大学大学院）

⑤里耶秦簡の字形認識 ―网部字―

村田　萌

湖南省湘西土家族苗族自治州龍山県の里耶古城の古井戸から約三万八千と五十一枚ほど発掘された『里耶秦簡』の文字群について、その「字形認識」を考察する。里耶秦簡文字は筆画の省略が多様であるかにみえるが、そのバリエーションは当然ながら、当該文字であることが認識できる範囲にとどまる。しかし、何をもって当該文字としての判読性を担保しているのであろうか。また、何をもって当該文字として認識しているのであろうか。本発表では、网冠に焦点を当て、その問題を考察する。

网冠では、常に冈の形状を維持する。冈や冈などの字形変化が起きるものの、筆画の増減はいっさい見受けられず、一貫して五画で構成されているのが分かる。このように、ある文字が、その文字として認識される字形のバリエーションの範囲を枠組みとして捉えた際に、その枠組み内にある様々な字形に一貫して表れている共通した事例を、本発表では「字形認識」と呼ぶこととする。

本発表の検討内容は、『里耶秦簡』第一・二輯（湖南省文物考古研究所編・文物出版社、二〇一二年一月）所掲の全字を観察した上で、部首が冠にあたる文字に焦点を当てる。「字形認識」を考察する上で、文字の偏と旁それぞれの文字例が多く見られる文字を考察する必要があるため、本発表では里耶秦簡中の网部字「署」「置」「罪」「羅」「罰」「詈」「罷」を挙げ、里耶秦簡文字の筆画変化に起こる法則性を考察する。网部字を上下に分断し、更に网部字上下それぞれの字形構造、線の形状、文字の傾き、筆画の増減を考察の主軸とし、それぞれを更に細かく分類表示し、考察を進める。本発表は、里耶秦簡内の字形的特徴を探ることを目的とし、字形認識の一端を解明するよう探求していくものである。

（大東文化大学大学院）

⑥秦印に関する一考察

滑田　一輝

本発表は、戦国古璽研究の一環として行うものである。かつて「古璽」と総括されてきた印は、荘新興、陳光田、肖毅等による分域研究の成果を受け、現在では戦国時代の国に依って系統分類することが一般的になりつつある。すなわち古璽は、「楚系」「燕系」「齊系」「晉系」の四種、あるいはそれに「秦系」の秦印を加えた五種に分類され、国別の分域研究が行われている。徐暢『古璽印図典』（天津人民美術出版社、二〇一六）は、約九五〇〇件に及ぶ璽印資料（新出土璽印・封泥・陶文を含む）を上記五系統の国に分類、その公私を可能な限り明らかにしており、最新の古璽研究が一望できる近年の大きな研究成果の一つである。本発表では『古璽印図典』から抽出した秦印を中心に検討をする。

楚・燕・齊・晉、四国の古璽に比して、秦印には特有の印風を見ることができる。従来、秦印の素材となる文字はいわゆる小篆に近く、権量銘に扱われるような草卒なイメージで紹介されることが多かった。しかしながら、実際その字形は特に私印において変化が極めて多様で、規範的な小篆に近いものから、大篆に近いものまで多様である。また、界画を施した印面中の空間処理に応じた減画、伸長等も多彩で、秦人の文字の運用感覚が如実に看取されるものであり、古璽印の中でも極めて重要な位置を占めているといえる。

印面中の字形の変化はその章法と密接に関連する。印中の字形は隣り合う文字同士の関連によって変化をするものである。字形はその章法に影響を与え、章法はまた字形に影響を与える。ゆえに、本発表では、秦印の章法に着目し、印面における字形変化について考察する。あわせて秦系の金石文・簡牘といった文字資料と比較検討し、秦印における字形変容の多様性について詳細を明らかにしたいと考える。

（東京学芸大学）

⑦蔡邕飛白創始説について

仲村　康太郎

唐・張懐瓘『書断』に、飛白は後漢の蔡邕が作ったという。『書断』は従前の言説に目を配り、そこから書体の作者について妥当な見解を導き出す傾向があるが、蔡邕飛白創始説についてはその根拠を明らかにしない。この説は崔備「壁書飛白蕭字記」（『法書要録』巻三）、唐玄度「十体書」（『墨池編』巻一）、李綽『尚書故実』などにもみえ、遅くとも中晩唐には定着していたことが知られるが、『書断』以前に蔡邕が飛白を作ったとする明確な記述は見出せない。そのため、従来張懐瓘が独自にこの説を提示したとみなされることもあった。一方で、「壁書飛白蕭字記」の注に引く南斉・蕭子良「古今書体」に、蔡邕と飛白をめぐる示唆的な記述があることも従来指摘されている。この「古今書体」の引用は、蔡邕飛白創始説の起源を『書断』以前に遡らせる有力な根拠となり得るが、次の問題が存する。すなわち、①こんにち京都・毘沙門堂に蔵する写本『篆隷文体』は、その所謂「古今書体」に相当すると思われるが、現存の『篆隷文体』では飛白を後漢・霊帝の作とし、蔡邕に言及しないこと、②「古今書体」の引用が「壁書飛白蕭字記」本文に対する注の意味をなしていないこと、③現存の『篆隷文体』飛白には文意の一貫しないところがあること、である。

本発表では以上の問題点をまず指摘し、そのうえで蔡邕飛白創始説が『篆隷文体』に遡る可能性を検討する。検討に当たっては、『篆隷文体』の影響が認められる韋続「五十六種書」、唐玄度「十体書」、及び近年再発見された韋懿『古今文字讃』、これら唐代の著作に手がかりを求め、如上の問題を解決する整合的な解釈を示す。さらに、北宋・夢英「十八体篆書碑」にみえる蔡邕飛白創始説が、『篆隷文体』でなく『書断』に基づくことを指摘し、それが示唆することについて私見を述べたい。

（京都大学大学院）

⑧河井荃廬の訪中と交流 ―上海・杭州を中心に―

川内　佑毅

近代日本篆刻の第一人者に挙げられる河井荃廬（一八七一―一九四五）は、明治三三年（一九〇〇）に初めて訪中し、呉昌碩に直接師事するほか、滞在中に多くの中国人士らと交流した。なかでも、杭州滞在中には西泠印社創設者である王禔・葉銘・丁仁らと交流し、上海では羅振玉や汪康年や呉隠らと度々交流したことが確認され、その交流の実態は印譜に収録された荃廬の刻印によって裏付けられる。本稿では、その一次資料である『日本何井僊郎印譜』（浙江図書館蔵）、河井荃廬自稿『訪中日記』（小林斗盦旧蔵）、『荃樓印存』（王福庵旧蔵、復旦大学図書館蔵）の分析を通して、主に上海と杭州滞在中における河井荃廬と中国人士の交流の実態について考察する。

稿者はこれまでに、『日本何井僊郎印譜』については「河井荃廬が中国人士に刻した印―『日本何井仙郎印譜』を中心として」（『書法漢学研究』二八号、二〇二一年）、『訪中日記』については「河井荃廬の渡華と人的交流―荃廬自筆「訪中日記」を中心に」（『書法漢学研究』三一号、二〇二二年）において、それぞれ資料調査の結果を著した。また、これらの成果の一部は、西泠印社主催第七回孤山証印学術研討会（二〇二三年）において「河井荃廬訪中及交流―以西泠印社人士為中心」と題して口頭発表を行った。

今回は、これら従前の研究成果を踏まえたうえで、新たに王福庵旧蔵『荃樓印存』の分析を交え、三件の一次資料を包括して導き出された考察について発表する。『日本何井僊郎印譜』に収録される印の多くは、『訪中日記』が記された一九〇〇年末～一九〇一年二月の間に刻されたものと考えられ、『荃樓印存』所載印とともに未発表の作例も少なくない。印譜所載の印影・拓款と日記に記載される交流の実態を照合することで、これらの資料は荃廬の中国滞在中の交流の実態の示すうえで相互に補完しあう「史料」となりうると考えられる。

（東洋大学）

⑨原田大観の訪中収蔵活動について

下田　章平

本発表は、近代書画碑帖収蔵史研究の一環として行うものであり、特に収蔵史上劃期をなす辛亥革命から第二次世界大戦終了時までの時期に活動した原田大観（二代目庄左衛門、一八五五―一九三八）を検討の対象とする。原田大観は原田家の家督と庄左衛門の名跡を継承して博文堂を立ち上げた。明治四〇年代（一九〇七―一九一二）には美術書の出版や、日本を代表する書画碑帖を扱う美術商として活動を展開し、関西中国書画碑帖コレクションの形成に大きな役割を果たした。

博文堂の収蔵活動に関しては、鶴田武良「原田悟朗氏聞書 大正―昭和初期における中国画コレクションの成立」（『日中国交正常化20周年記念「中国明清名画展」』、財団法人日中友好会館、一九九二）などに断片的に記されてきたが、これまであまり詳しくは検討されてこなかった。二〇二〇年、発表者は博文堂関連資料（個人蔵及び行田市郷土博物館所蔵）が厖大に存在することを知り、その後、所蔵者（所蔵機関）の資料提供を受け、美術商・博文堂の初期の活動実態を前稿において検討した。すなわち、明治四四年（一九一一）から大正中葉までの羅振玉（一八六六―一九四〇）コレクション、大正中葉から昭和初期にかけての著名中国人収蔵家のコレクションの流入に博文堂が積極的に関与していた点である。

本発表では、原田大観『中国出張日誌』（大正一二年一〇月二一日―一一月一八日）及び同時期の博文堂関資料の分析によって、原田大観がいかに中国人収蔵家と交流し、中国書画碑帖を日本へもたらしたのかを解明することを目的とする。このことにより、大正中葉以後の博文堂の収蔵活動が明らかになるばかりではなく、日本への中国書画碑帖の流入の実態解明にもつながるものと考えられる。

（相模女子大学）